報告１

古着から展示可能な民族衣装へ
中国少数民族の装いにおけるグローバルな広がりと価値の変遷

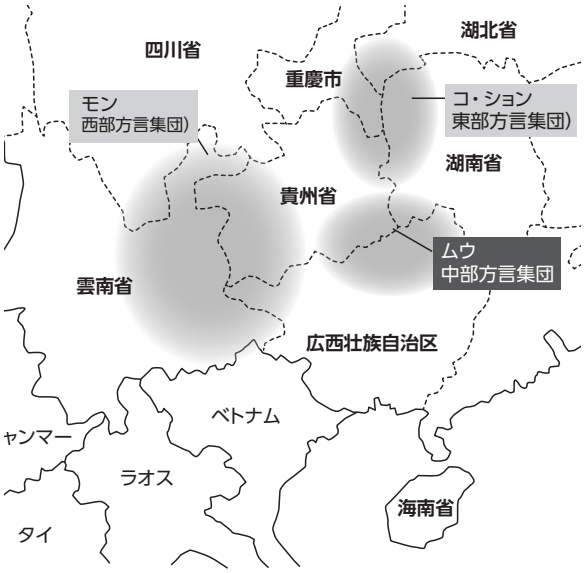
佐藤 若菜
新潟国際情報大学

私はこれまで中国貴州省東南部のミャオ族について、2009年３月から2011年５月までの調査をもとに、文化人類学的視点から民族衣装を通したコミュニケーションを中心に研究してきました。具体的には、衣装の製作・着用・保管・所有・譲渡からみたミャオ族の母娘関係と、その他のさまざまな社会関係について分析してきました。その内容については、2020年の２月に出版した『衣装と生きる女性たち――ミャオ族の物質文化と母娘関係』という本にまとめました。

調査地とミャオ族の概要

調査地は、中国の西南部、雲南省や四川省がある、東南アジアに近いエリアです（資料１－１）。そのなかでも貴州省が、ミャオ族（苗族）の集住地の一つとして知られています。ミャオ族にはモンをはじめさまざまなサブ・グループがありますが、なかでも私はムウという中部方言集団について調査をしてきました。

ミャオ族は、中国共産党によって公認された55ある少数民族の一つです。中国国内には約942万6,000人いて、少数民族のなかでは統計上５番目に人口が多いと言われています。



資料１－１　調査地概要

ミャオ族は、自称や言語、居住地が異なる多様な民族集団を吸収することで形成されてきたと言われています。ムウとコ・ションとモンだけではなく、たとえばムウのなかでも、貴州省東南部に住むムウはさらに39の下位集団に分かれるのではないかとも、民族衣装ベースの調査などでは言われています。

ムウはミャオ族の人口数の約60パーセントを占めており、1980年代後半以降に公開された情報がもっとも多く、外部からのミャオ族認識に対して、確固たる民族イメージを築いてきた民族集団と言われています［谷口 2003］。特にムウ女性の民族衣装に注目が集まり、ミャオ族文化の「模範的中心」として扱われてきたと言われています［鈴木 2012］。たとえば中国国内でお酒や調味料のパッケージに写真が使われたり、テレビや雑誌にもたびたびムウの女性が出てきたりということで、ミャオと言えばムウの女性を想像することが多いのです。

今回の報告では、ムウの民族衣装がグローバルに広がっていくなかで、どのようにローカルに影響を与えてきたのかを考えてみたいと思います。

世界の博物館・美術館が所蔵するムウの衣装

ムウの衣装が世界中に広まったことを端的に表す事例として、世界各地の博物館・美術館に所蔵されている点が挙げられます。たとえば有名なところでは、大英博物館やアメリカの民芸国際博物館、フランスのリヨン織物装飾芸術博物館にも所蔵されていますし、ニースの国立東洋美術館にもあります。

イギリスやフランスを中心にコレクターや研究者が多いですが、それ以上に多いのが台湾です。台湾にあるカトリック系の輔仁大学には織品服装研究所があり、そこでは大量に民族衣装を所有し、分析しています。個人コレクターも多く、たとえば長河芸術文物

館にはたくさんの収集品があり、2008年には、このコレクションが優れているとして、ハワイ大学で長河芸術文物館のコレクションを展示しています。

中国国内でも、中国美術館や北京民族文化宮など、主要な芸術や民族に関わる政府機関がミャオ族の民族衣装を所有しています。もちろん個人コレクターもいて、もともとミャオ族を中心とした写真家だった方が、写真を撮るなかで民族衣装を集めて建てた苗疆故事民族服飾博物館もあります。

日本ですと、国立民族学博物館や文化学園服飾博物館、神戸ファッション美術館もミャオ族の民族衣装を所有しています。個人コレクターもいて、ミャオ族刺繍博物館が名古屋の常滑にあります。また岩立フォークテキスタイルミュージアムにもミャオ族の民族衣装が所蔵されています。

この他にも、ファッションへの展開も盛んに行われています。たとえばエルメスの2010年秋冬コレクションでは、「ミャオ族の100の襞」というタイトルでミャオ族のスカートをデザインしたスカーフが販売されています。また、クリスチャン・ディオールの1998～1999年の秋冬コレクションのジュエリーについて、ジョン・ガリアーノというデザイナーが「中国のミャオ族からインスパイアされた」と2015年のインタビューで話しています。

ミャオ族の民族衣装への注目

新中国成立以降、ミャオ族文化のなかでもっとも注目されてきたのが民族衣装だと言われています[Schein 2000：54, 61]。中国では、1950年代からミャオ族の民族衣装を文化や芸術とみなした研究が始まり、1980年代以降には急激に増加したとされています[楊 1998：315]。特に世界中の研究者や染織家、写真家、収集家、ガイドなどがミャオ族の民族衣装に注目しました。

1956年から1957年にかけて、中国の民族政策の一環として少数民族社会歴史調査が行われました。そのなかでミャオ族の民族衣装も調査され、その後文化大革命を経て、1984年に北京民族文化宮という政府機関で「中国ミャオ族服飾展」が開催されました。多くの研究者が、この「中国ミャオ族服飾展」がミャオ族の衣装が国際的に認知され始めたきっかけだと指摘しています。

私も、たしかにこの展示が大きく広まるきっかけだったことは間違いないと考えていましたが、それ以上の情報が長らくなかったので、「北京民族文化宮での中国ミャオ族服飾展までにどのようにして衣装を集めたのか」、「なぜミャオ族の衣装だったのか」といった点について、もう少し掘り下げてみました。

資料１－２　古着から展示可能な民族衣装への流れ

時期	展覧会
1984年	北京「中国ミャオ族服飾展」
1986～1987年	香港「中国ミャオ族服飾」
1987～1988年	アメリカ Richly Woven Traditions: Costumes of the Miao of Southwest China and Beyond
1994年	イギリス Miao Costumes and Related Textiles
1999年	台湾「ミャオ族服飾特展」

1984年を契機として、1985年以降には、ミャオ族の民族衣装に関する研究が増加し、書籍の出版が盛んになります。特にムウの衣装に関しては、工場などで生産されるのではなく、あくまでもミャオ族が手作りしたものが商品化するという流れがあります。同時に、先に述べてきたように、博物館や美術館に所蔵され、また収集家も増加します。こうしてサブグループの多さによる多様で華やかな衣装が、ミャオ族イメージとなって増殖していったとされています[Schein 2000]。

海外での展示会も、やはり1984年以降に増加していきます。まず1984年、北京で「中国ミャオ族服飾展」が開催された後に、中国政府のサポートによって香港で1986年から1987年に「中国ミャオ族服飾」が開催されました。1987年から1988年にはアメリカで、1994年にはイギリスで開催され、その後1999年に台湾へと広がってきます（資料１－２）。

「展示可能」の観点からみるミャオ族の衣装

以上の流れを踏まえて、本報告では「1984年の中国共産党による発掘と展示だけが、ミャオ族の民族衣装の価値の転換に大きな影響を与えたと言えるのかどうか」を考えます。特に注目しているのは、それ以前の動きです。

中国において民族文化が広まるプロセスに関する研究では、共産党への着目がどうしても欠かせないものになりつつありますが、やはり再度そのポイントを問い直すことが必要なのではないかと考えています。2016年からこのテーマに関する研究を始めた

のですが、1980年代以降に出版された本を一つひとつ読んでいって、「どのような人が関わってきたのか」、「誰が衣装を収集していたのか」という情報を少しずつ集めてきました。そのなかで浮上したのが、一つは日本の影響でした。本日の報告では、日本からの影響に着目しながら、少数民族の衣服が展示可能なモノになる過程について明らかにしたいと思います。

報告のテーマに、「展示可能」というキーワードを出しました。この考え方について他の研究を参照しています。2020年に中谷文美先生が*Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*という本を出されています。杉本星子先生も参加されている本です。このなかで、「あるモノが文化財になる過程には、消費可能なモノへの転換がある」と指摘されています。

具体的に取り上げられているのはインドネシアの事例です。スハルト政権崩壊以来、インドネシアでは地方分権化が進み、各自治体は独自の文化を強調することで、他地域との差異化を図ってきたと言われています。西ティモールでは、村長の妻を中心とした女性の収入創出プロジェクトのなかで、色鮮やかな縫取織り（ブナ織り）のチューブスカートが新たに生み出され、村々に広まっていったと指摘しています。ブナ織りは地域全体を代表する手織り布として観光客向けに生産されるようになっただけでなく、現地の女性たちにとっても消費可能なもの、つまりブナ織りをスカートとして自ら身に着けるようになるという転換があったとされています。こうした動きはあらゆる文化財でみられることで、「着用可能」というのはその一部ですが、何らかのかたちで消費可能になっていくことが、一つ価値が大きく変わっていく過程に関わっているのだと指摘されています［Nakatani 2020］。

今回の報告では、着用ではなく「展示可能」という観点から考えます。日本の影響によって、それまで展示されていなかったものが展示可能になることで、価値の転換があったと考えられます。ミャオ族ではどのようなかたちで消費可能になったのか、展示に着目しながら1980年代以前の動きを分析したいと思います。

調査方法としては、聞き取りと資料収集が中心です。1980年代を中心にミャオ族の民族衣装の展示や書籍出版に関わってきた方がたに中国で調査を繰り返してきました。また日本においても、ミャオ族関係の出版に関わっていた京都の美乃美という出版社の元職員の方や、展覧会に関わった三越の資料室にもうかがって、資料収集やインタビューなどを行いました（資料１－３）。

資料１－３　聞き取り調査概要

調査時期	対象者
2015年3月 2016年9月	元貴州省美術家協会の職員（F、M）
2017年2月	出版者美乃美の元職員（K）、 人民美術出版社の元職員（H）
2017年3月	出版者美乃美の元職員（K、S）、 人民美術出版社の元職員（H）
2017年3月	三越資料室で展覧会の資料収集
2019年3月	貴陽市工芸美術研究所等の元職員（L）、 個人博物館経営者（Z）

美術工作者による図案収集と創作活動

まず、ミャオ族の民族衣装が広まったきっかけの一つとして、美術工作者による図案収集とそれに基づく創作活動についてお話しします。

1949年に中華人民共和国が成立し、1950年以降、民族政策のもとに民族調査が始まりました。そこでは生業、社会状況、風俗習慣などを調べていました。

1957年、貴州省東南部でその調査が行われました。３か月間行われた調査のなかで、民族衣装がかなり細かく調べられました。たとえば、①性別・年齢別の衣装はどんなものか、季節別、場面別、儀礼別にどんな衣装を着ているのか、②材料調達から製作までの工程や、③上衣、頭布などの形式・紋様・色彩の分析、④衣装形式や居住域に基づく衣装分類、⑤男女別の衣装の変化などが調査されました［貴州省編輯組（編）1986：313］。

この調査のなかでも特に重視していたのが、衣装分類だと言われています。衣装を通してミャオ族のサブグループを分類していく、どの地域にどういったミャオ族がいるのかを分類することが、長年にわたって中国で盛んに行われてきました。

その衣装分類のなかでとりわけ注目された点が、衣装の特徴および刺繍の特徴と、分布域とがどのように対応しているかということです。調査資料には資料１－４のような刺繍の図案も掲載されています［貴州省編輯組（編）1986］。

1950年代に出版されたミャオの衣装に関する書籍の一つの特徴として、民族衣装全体を示したもの

資料1－4　刺繍の図案
［貴州省編輯組（編）1986］

はまったくありません。刺繍や紋織を拡大して撮影したもの、それを模写したものだけが出版されています。

少し後になりますが、1960年代にも中国国内ではいくつか展覧会が行われていたことが、資料収集からわかってきました。基本的には、図案の模写か、政府機関に所属している美術工作者が創作した民族的特色のある工芸美術作品を展示しているのみです。私の知るかぎりでは、展示品のほとんどが民族衣装の図案、もしくはその図案をもとにした創作物であったことがわかっています。

美術工作者による創作物には、ミャオ族のろうけつ染めの図案の一部を取り出して並べかえたり、同じようにろうけつ染めで表現したり、もしくは刺繍やろうけつ染めにある表現を陶器などに反映させた作品がありました。こうした創作物のために民族衣装が収集されてきたわけです。

1953年から美術家協会貴州分会に勤務してろうけつ染めを製作していた漢族の男性職員の方にインタビューをすると、「1953年に着任してすぐに民族衣装を収集し始めた」とのことでした。「1956年ごろからミャオ族のろうけつ染めに関心を持ち始めて、特に図案を収集しようと思い立った」と話しています。当時はカメラがないので、農村を回って一つひとつ絵を描いていたそうです。

また、当時はミャオ族の民族衣装には商品や芸術品としての見方がなく、「汚いとさえ思っていた」と話していました。つまり民族衣装そのものに対しては、着古したもの、汚いものという認識があったわけです。農村部に住む人に対する蔑視や少数民族に対する蔑視は現在も多少ありますが、当時は現在よりも強かったのではないかと思います。

なぜ図案に注目したのかを訊ねると、フランスに留学したことのある雷圭元先生の授業で図案学を学んだとのことでした。日中戦争の時期に、沿海部の多くの知識人は内陸のほうへ逃げていきました。そのなかで雷先生は貴州省へ逃げていき、たまたま民族衣装を目にしたと言っていたそうです。雷先生はその男性職員に「ミャオ族や少数民族の図案は価値のあるものだから、貴州省へ行きなさい」というアドバイスをくれたそうです。そのため彼が貴州分会に着任してから、衣装を収集しつつ図案を集めるようになったようです。

勤務時期としては少し後になりますが、1973年以降に貴州省の美術関係の政府機関で働いていた職員の話によると、彼が小学生だった1950年代には、民族衣装を良いものと思ったことはなかったそうです。ミャオ族は農村部に住んでいますが、「町に野菜や果物を売りに出てきているミャオ族を見かけることがあったが、決して美しいと思ったことはない。とにかくぼろぼろで汚いイメージしかなかった」と話していました。しかし、1979年の貴陽市工芸美術研究所に着任していた時期に、「民族衣装の収集活動を始めて、図案を細かく見るときれいなのだと気付いた。だからこれを陶器や青銅器の模様として残していこうと思った」とインタビューでは語っていました。

つまり当時の民族衣装については、衣装そのものを展示するとか、もしくはそこに価値があると考えるのではなく、図案に着目してそれを収集し、またそれを別の作品に反映していくという扱いが、中国では主流を占めていたのだと思います。

以上の内容を簡単にまとめます。1950年代から複数の美術関連の機関が農村で民族衣装の収集・調査活動を開始し、そこで模写した図案を自身の創作物、絵や陶器に反映させていたことが、中国での調査からわかりました。当時、民族衣装の図案だけが注目されていた理由として、衣装そのものへの評価が低く、図案の美しさだけが評価されてきたことが挙げられます。これはもちろん当時の少数民族への蔑視も関連していると思います。加えて、中華民国期のフランス留学者による図案学の導入、日中戦争時の民族との接触が、民族衣装の図案を取り上げる要因となっていたことがわかりました。

改革・開放政策直後に日本で開かれた展覧会

次に日本側の調査結果についてまとめます。1978年に中国で改革・開放政策が始まりましたが、その直後に日本で開催されたミャオ族衣装の展覧会に着目

資料１－５　日本での展覧会のチケット

資料１－６　垣本剛一氏（美乃美社長）のあゆみと日本における中国の民族衣装との関わり

1952年	学術出版社「雄渾社」創業
1953年	立命館大学内に営業所を開設
1971年	学園紛争を契機に仏教に関心を持つ 日本仏教普及会を設立
1974年	中国仏教協会の招請により訪中
1974年	工芸への関心から出版社美乃美を設立
1975年	第一次仏教代表団として訪中
1977年	第二次訪中
1980年	『中国仏教の旅』の取材開始。取材のなかで少数民族の布に出会う
1981年	美乃美初の日中合同出版『中国仏教の旅』
1979年	フォークロア・ファッション・ブーム
1979年	日中共同出版『中国の旅』講談社
1978年～	国立民族学博物館「日本民族文化の源流の比較研究」
1979年	国立民族学博物館が民族文化宮（北京）に少数民族の衣装収集を依頼

します。

中国国内では1984年に北京民族文化宮で大きな展覧会が行われましたが、その３年前の1981年５月に、三越と出版社美乃美の主催により、「中国55少数民族服飾展」と「特別出陳　貴州苗族刺繍・ろう染・民芸品」が日本で開催されたことについては、これまでほとんど注目されていませんでした。そのチケットが資料１－５です。この展覧会は東京をはじめ６都市で開催され、53日間で来場者数は６万人、展示品は約1,000点だったそうです。かなり大規模な展覧会だったことがわかります。

展示品となった民族衣装は、新中国成立以降30年かけて中国美術家協会貴州分会が収集してきたものだと指摘されています［中国美術家協会貴州分会・中国人民美術出版社（編）1981:5］。ここでは、マネキンに着せるかたちで衣装そのものを展示しています。

中国の論文を読むと、少なくともミャオ族の衣装の国外での展示は日本が初めてだと記載されています。日本での展覧会にあたっては、美術家協会貴州分会から５人、中央民族学院から９人が訪日したと言われています。彼らにとっては、中国少数民族の衣装そのものが展示品としての価値を有することを知る契機となったのではないかと考えています。

中国でインタビューした美術家協会貴州分会に勤務していた漢族男性は、「日本側の関係者から、東京での展覧会の最後に、『今回展示したものをすべて買い取りたい』とお願いされた」と話していました。美術家協会貴州分会にとって、民族衣装が商品として扱われた経験はこのときが初めてで、これにはかなり驚いたそうです。貴州分会だけでは判断できないので、北京に報告して日本側の要請に対する判断を仰いだけれども、結局は販売不可の決断が下されたということでした。このときに「民族衣装は売れるんだ」ということを認識したのだと彼は話していました。

美乃美が展覧会を開くまでの経緯

次に、京都にあった出版社美乃美がなぜ展覧会を開くことになったのか簡単にお話しします。これには1972年の日中国交正常化が大きく関連しています。実際に日中民間交流が増加するのは1978年の日中平和友好条約以降です。正式な国交を背景に実質的な交流が開始され、これ以降、中国ブームとあいまって日中民間交流が爆発的に増加しました。

美乃美の社長で当時展覧会に関わっていた垣本剛一さんは亡くなっておられて、その息子さんにインタビューを行いました。垣本剛一さん自身は日記のようなものをたくさん残しておられたので、それをコピーさせていただき、どんなことがあったのかを資料１－６にまとめています。そもそも1950年代に

雄渾社を創業し、立命館大学内に営業所を開設したそうです。郭沫若の研究者が立命館にいて、その人たちとの交流もあって中国に関心を持ち始めたという話もあります。

雄渾社は大学生むけに教科書を売っていましたが、1971年になると学園紛争を契機に教科書がまったく売れなくなってしまいました。そうして時間を持て余していたときに仏教に関心を持ち始めて、日本仏教普及会を設立します。その流れのなかで、立命館大学の先生のサポートもあり、1974年に中国仏教協会の招請により訪中することになったそうです。

帰国したあと工芸に関心を持ち始めて、1974年に出版社美乃美を設立します。1975年には第一次仏教代表団として訪中し、1977年にも訪中します。その内容は『人民日報』にも取り上げられています。1980年からは、中国と美乃美との共同で本を出版しようという流れになったそうです。それで『中国仏教の旅』の取材を始めます。その取材のなかで少数民族の布に出合ったということです。

その内容が朝日新聞にも掲載されています。これは垣本さん自身が答えていますが、「『中国は地球の縮図』だそうだ。この国にひとかたならぬ興味をもち、情熱を傾ける。本を出すために、日本の伝統工芸を調べていくと、いつも中国に突き当たった。『陶磁や織物はほとんど中国文化の影響があるし、げたや刺しゅうのクロスステッチも、中国の少数民族にその起源がある。中国はまだ知られてへんね』」と記載されています。最初は日本の工芸に関心を持って、中国に起源があるのだという考えから、どんどん少数民族の文化に関心を持っていったことがわかります。

その後、美乃美では『中国工芸美術叢書』を出版しました。文革終了直後の当時は紙も印刷技術もまったくなかったので、内容は中国で準備して、印刷は日本で行うかたちで出版していったそうです。

なぜ民族衣装に関する大型本を出版し、民族衣装の展覧会を開催することができたのかを考える際に、1970年代、1980年代に日本でどのようなことがあったのかを見てみると、まず、国立民族学博物館（民博）で「日本民族文化の源流の比較研究」という共同研究が行われています。また、この時期の新聞には「日本文化の源流が中国の少数民族にあるのではないか」と説く記事がたくさん掲載されています。こうした動きが後に照葉樹林文化論などのブームにつながっていくのだと思います。1979年には北京の政府機関である民族文化宮に、民博が少数民族の衣装収集を依頼しています。これについてはいずれまとめたいと思っています。

もう一つ、垣本さんの話として、当時の京都では大型本、特に図案や衣装を掲載したエスニックなものはとにかくよく売れたそうです。その要因の一つはフォークロア・ファッション・ブームで、もう一つは、西陣の呉服界で民族紋様が広まっていて、参考にするためにこうした大型本が飛ぶように売れていたという京都特有の事情があったと推測されます。

簡単にまとめると、1978年以降の日中民間交流の急増とそれに伴う日本人による中国文化への関心のなかで、中国少数民族の民族衣装も注目されていきました。その過程で、中国少数民族の民族衣装そのものの展示が行われました。こうした流れには、当時の日本文化の起源を中国文化、特に少数民族文化に見出すような学問的潮流も影響を与えていたのではないかと考えられます。

また、展覧会では1950年代から中国の美術工作者によって、別の目的で収集されてきた民族衣装が使用されました。つまり1950年代に図案の収集という目的で民族衣装が集められてきたわけですが、それが日本との接触によって、今度は衣装そのものを展示する流れにつながっていったことがわかりました。

日本での展覧会開催が中国に与えた影響

中国国内においても、1982年には民族衣装そのものの展示が始まります。ミャオ族のものだけではないですが、「貴州民間美術展覧」では民族衣装の展示が行われました。また、この時期には民族衣装の展示と並行して、図案の展示や美術工作者による創作品の展示も引き続き行われていました。貴州省への注目も高まっていたことが資料からもわかってきました。こうした流れが1984年の北京民族文化宮での展覧会につながっていったのだと思われます。もちろん民博の影響も大きいと思います。日本での展覧会、または日本からの民族衣装収集の要請が影響して、1984年の展覧会につながっていったのではないかと思っています。

本日の報告内容を簡単にまとめます。中華民国期のフランス留学者による図案学の導入や、日中戦争時の少数民族との接触を背景に、1950年代には中国

の美術工作者により少数民族の民族衣装の収集、図案の模写、民族調の作品の創作が行われていました。しかし衣装そのものへの評価は低く、図案の美しさだけが注目されていました。他方、1970年代の日本では中国文化に日本文化の起源を求める動きや日中国交正常化を背景に、中国少数民族の民族衣装が注目され、展示されました。そこで展示品となったのが、1950年代以来、中国で収集されてきた民族衣装でした。1981年の日本での展覧会を契機に、中国でも民族衣装そのものを展示するようになったことがわかりました。

文革終了後、中国の少数民族の民族衣装は展示するモノとしての価値が見出されていったことがわかりますが、その契機となったのは1981年の日本で開催された展覧会でした。ただし、展示するために収集されていたわけではない衣装が、そもそも民族衣装に関心を持っていたわけではない主催者によって展示可能なモノへと転換した過程には、日本と中国において異なる動機が存在し、それらが偶発的に重なることによって展示可能なモノになったという特徴を見出すことができるのではないかと思います。

参考・参照文献

佐藤若菜（2020）『衣装と生きる女性たち――ミャオ族の物質文化と母娘関係』京都大学学術出版会

鈴木正崇（2012）『ミャオ族の歴史と文化の動態――中国南部山地民の想像力の変容』風響社

谷口裕久（2003）「『モン・ミャオ』における移住と文化社会戦略」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態――中国周縁地域の歴史と現在』風響社、135-157頁

中国美術家協会貴州分会・ 中国人民美術出版社編（1981）『貴州苗族刺繍』美乃美

Nakatani, Ayami (ed) (2020) *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*, Lexington Books.

Schein, Louisa (2000) *Minority Rules: The Miao and the Feminine in China's Cultural Politics*. Durham: Duke University Press.

貴州省編輯組編（1986）『苗族社会歴史調査（一）』貴州民族出版社

楊正文（1998）『苗族服飾文化』貴州民族出版社

■質疑応答

帯谷知可（司会）　ありがとうございました。たいへん興味深いお話でした。私もかつて10年ほど民博におりましたので、中国展示の少数民族の衣装のパートが充実していることはよく存じています。佐藤さんの著書にも出てきますが、この色鮮やかで刺繍の技術もすばらしいミャオ族の衣装が、美しいもの、展示可能なものとしてクローズアップされていくプロセスを緻密に明らかにしていただいたご報告だったと思います。それに日本が大きく関わっていたということも、とても興味深い点でした。

簡単な事実確認等の質問がありましたら、お願いします。

杉本星子　興味深く報告をうかがいました。私はいま西陣のすぐ横に住んでいるのですが、よく織屋さんに行くと、たくさんの世界の民族衣装や図案の本があります。まさにこの時代にみなさんお買いになったものだなと思ってうかがっておりました。日本側と中国側と意識がずれながら、目的もずれながら、しかしやがてそこが一致してきて……というあたり、まさにそうだなと思いました。

一つ確認です。図案の収集から民族衣装の展示に転換するところです。民族衣装の場合は、技法や素材、スタイルがありますよね。ただ図案が載っている布を展示するのではなくて、衣装として展示するところへの変化が、中国側にとってどういう意味があったのか。これはすでに佐藤さんが書いておられると思いますが、1978年から少数民族の優遇政策が始まります。中国のなかで、少数民族も含めて民族意識が高まっていき、そのなかでスタイルの違いみたいなものが民族のサブグループや、あるいは民族の違いの表象にもなっていたと考えられます。民族「衣装」の展示になるときには、それも一つの要素として大きかったのかなというあたりの中国側の状況をうかがいたいと思います。

佐藤若菜　つまり中国政府による少数民族の位置付けが大きく変わったことが、展示にも大きく影響を与えていたかということでしょうか。

杉本　図案ではなく衣装のスタイルになると、さらにまた民族の違いも明確に出てきますよね。それも含めて、「民族衣装を展示する」ということの意味付けの背景として、少数民族の位置付けの変化が大きかったのでしょうか。

佐藤　1984年の民族衣装の展示で、積極的に行っていたのは分類です。かなり独特な分け方ではありますが、サブグループではなく「5地域に分布していて、こんなにいろいろな種類があります」ということを示しているかのようです。そのように、少数民族に対する細かい分類への注目が大々的に行われているのが一つの特徴だと思います。そういったことが、少数民族に対する関心として大きく表れているのではないかということですよね。

杉本　はい。民族衣装の展示になることの意味の後ろに、それが絡まっているのではないでしょうか。

佐藤　たしかに図案だけを見ている分には、どの地域かというのはすごくわかりにくいです。衣装全体、スタイルとなると、「このエリアはこんなスタイルで」とか「この地域はこんなスタイルで」というようになって、よりミャオ族に関心を持つようなものになります。また、やはり美しいものとして展示されている部分もすごく大きいので、優遇政策というか、「少数民族も平等なんだ」という意識のようなものを宣伝していくことと合致していると思います。

杉浦未樹　報告のタイトルに「古着から」とありましたが、展示しようとしていたものには、同時代に作られたものは入らないということですか。ある程度古いものでないと展示しようと思わないということなのか、伝統や民族の様式にしたがっていたら比較的最近作られたものも含まれるということでしょうか。

佐藤　現在では新品を展示用に作ることはあるかもしれませんが、中国のミャオ族が特殊なのは、自分たちのために作ったもの、もしくはかつて着ていたものを――もちろんきれいなものであればあるほどいいとは思いますが――それを展示していく流れがあります。これは決して展示用ではなく、彼らが使っていたものを展示する。回数はさまざまですが、最低でも一度は着たものを展示しているので「古着」と書きました。もちろん最近作られたものもあると思いますが、あくまでも自家用に作ったものを展示しているという前提がそこにはあると思います。

松本ますみ　1980年代のことは私もよく憶えていて、雰囲気はだいたい想像がつくので、お若い方の探究対象になってしまったのだなという感慨を持ってお聞きしていました。

　1点だけ、三越で1981年5月に行われた展覧会のチケットには「中国シルクロードファッション世界初公開」と書いてありました。おそらく、この時代にはシルクロード・ブームがありました。それでたくさんの人が来たという気がします。当時NHKの『シルクロード――絲綢之路』が始まっていたかと思いますが、それにあやかった企画だったということを、どこかに書いておかれると、どうしてこんなにたくさんの人が来たのかという説明にもなると思いました。